

「まことの父、まことの師」 -マタイによる福音書講解説教 93-

民数記 第15章 37節～41節
マタイによる福音書 第23章 1節～12節

説教 岡村 恒 牧師

「あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである。」(10節)この日、エルサレムの神殿には過ぎ越しの祭りのために多くの人が集まっていました。懺悔の捧げ物を捧げ、祈りを捧げました。そこには教師がたくさんいました。律法を勉強し、それを実践して人々の模範となり指導する人々と、宗教的に熱心なパリサイ派と呼ばれるユダヤ教徒たちです。

「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ。」(申命記 6章5節)そう語りかけられた神は、この言葉を紙に記して小箱に入れ、額に括り付け、腕に巻いて印としなさいと、お命じになりました。(申命記 6章8節)律法学者やパリサイ派の人は人に見えるようにその箱を大きくしたり、衣の房を大きくして見せびらかしていました。それは私たちの誰にもある欲求です。私たちは神に愛されることを願う存在として造られました。額につけた箱も、手首に巻いた札も大きくします。そうすれば、いつでも神のことを思い祈れるからです。

しかし、人々にも愛されたいという思いがだんだん強くなります。自分を大きく見せたいのです。主イエスは、そのような思いがすぐに、本来の方向を見失って進んで行くことをご存知でした。神に背中を向けて神なき世界に向かってしまう。その有様を聖書は罪と呼びます。

主イエスは「律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている。だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな。」(2～3節)と言われました、非常に強烈な非難です。彼らは口ではいふけれども実行しない。「宴会の上座、会堂の上席を好み、広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。」(6～7節)主イエスは私たち全ての人間の中にある罪の大きさに目を留めて語られました。人に賞賛されるような喜びで、あなたは満足できるはずがない。神に喜ばれることでしか本当の喜びはないのだと。

神殿に集まっていた人々は皆、救い主の到来を待っていました。主イエスがエルサレムに来られたとき、人々はホサナ、ホサナ、主の名によって来たるものに祝福あれ、そう言って迎えました。しかし、ほんの数日後、主イエスは捉えられ、死刑宣告を受けます。このエルサレム

の群衆に私たちの姿が映し出されています。日曜日、礼拝に来て、神様がおられる、この私を神の子として、「生きよ」と招いてくださっていると聞いて喜んで歩き始めながら、聖堂を出た途端に多くの誘惑や悩みに囚われます。

神と等しい主イエスは、全ての物に満ちたお方です。しかし、その全てを手放して、私たちの罪を背負って十字架に付けられ、血を流し苦しみ死んでくださいました。聖書は神のひとり子イエス・キリストが天から地上に降り、死んで墓に降り、陰府(よみ)にまで降ったと記します。降りに降り、そこまで小さくなられたのが主イエスです。

主イエスをその身に宿したマリアも、受胎告知の時に神を褒め称えました。私は主の御名を崇めます。崇めるというのは大きくするという言葉です。マグニフィカート、私は神様を大きくします、そう歌いました。宗教改革者のマルティン・ルターは、このマリアの讃歌をしばしば口にしました。私たちも同じように、主の御名を大きく誉め称えて歩みたいのです。

この地上の旅を、そしてそれを終えた時にもなお取り去られない希望と命があります。これを私たちは救いと呼びます。救いの全てが、ただ神の憐れみにかかっています。私たちを、永遠の命を持つ神の子にして下さった、これが、聖書が語る救いです。

誰でも主イエスを信じて洗礼を受けるなら、その人は聖霊の賜物を受けて、聖霊の宮となります。自分の中に主イエスの霊が注ぎ入れられ、主イエスに「わが友、わが兄弟」と呼ばれ、父なる神に向かって「父よ！」と呼びかけて生き始めるのです。心の底から神を褒め称えて、神に感謝して歩むようになります。その先頭に主イエスご自身が立っておられます。私たちの唯一の教師です。そして真の父と共に、私たちを支えてくださる救い主です。

やがて終わりの日、私たちは神の前に立ちます。これは確実なことです。その日、神の食卓に着くこととなります。その日が確実に来るので、私たちは安心してこの地上の旅を、神に愛された者として、神を大きく褒め称え、見上げながら歩むことができます。聖書の約束は確実で、そのまま受け入れて信じて良い約束です。

(記 説教要約奉仕者)